

17

明治の文豪の作品中に見られた 日本医科大学前身の済生学舎

志村 俊郎¹⁾，弦間 昭彦²⁾

¹⁾ 独立行政法人 東京労災病院 第二臨床検査科，²⁾ 日本医科大学

日本医科大学のあるここ千駄木の地は、ご存じのように文豪が愛した町であります。本学の同窓会館は、明治期に二人の偉大な文人である森鷗外と夏目漱石が一時期住んだ旧居跡（旧東京市本郷区駒込千駄木町57番地）であり漱石文学発祥の地とも言われています。この住まいは、文化庁指定登録有形文化財で、明治20年頃、医学士中島襄吉（東京帝国大学明治29年卒、後に済生学舎廃校後の同窓医学講習会と日本医学校の産科学講師）の居でありました。この家は、明治23年10月に鷗外が1年余り住み、この間に、処女小説『舞姫（1890年1月、国民之友）』、『文つかい（1891年1月、吉岡書店）』を刊行しました。その13年後に漱石は、猫の家と通称されるこの家に明治36年3月から明治39年12月まで約3年半住みました。この漱石の書斎「我猫庵」では、「木曜会」と称し、夏目一門の漱石の教え子や、漱石を慕う若手文学者が集まり、さまざまな議論をした会合が開かれました。漱石は、この家に住んでいる間に『吾輩は猫である（1905年1月 服部書店）』『坊っちゃん（1906年4月、『ホトトギス』収録）』などの名作を執筆致しました。また、夏目漱石が、如何に千駄木かかわいに詳しいかは、漱石の『道草』（1915年朝日新聞に連載された長編小説）には、「その人は、根津権現の裏門の坂を上がって」「彼はまた団子坂をおりて谷中の方へ上がっていった」（『道草』P5 角川文庫 平成30年改訂初版発行）と小説の舞台ともなる漱石の居住していた千駄木近辺の記載が克明に書かれています。この建物は、現在愛知県の博物館明治村に移築保存されております。

鷗外の小説『青年』（1910年3月から翌年8月まで「スバル」昴発行所に連載）には、文中に本学の前身「日本医学校」（『青年』本文21項P209、注32P317 岩波書店2017年改訂第1刷）が出てまいりますし、また森鷗外の長男で、随筆家でもある森於菟も『父親としての森鷗外』（筑摩書房159、P14、1974年初版5刷）の「観潮楼始末記」に、鷗外が千駄木57番地から団子坂上の観潮楼に引っ越した千駄木の日本医大近辺を「この土地の東側は、崖になって見晴らしがいい。根津に近い方は土地がひくく道の西側は大きい」と描いた文章を残しています。また森於菟は、大正8年～昭和10年まで日本医学専門学校及び旧制日本医科大学で解剖学の兼任教授でありました。その間に於菟は、東京帝国大学医学部助教授を経て、大正15年より帝国女子医学専門学校の組織学・胎生学の教授でありました。さらに夏目漱石の書簡には、済生学舎創業者「長谷川泰」の実名が記されています。其の書簡とは、夏目漱石全集（第22巻2019年7月 岩波書店）の書簡の中に、本名の夏目金之助から劇作家若月紫蘭にあてた手紙（11月25日（金））付けに「本郷区元町一丁目三長谷川泰の裏」と泰の名前が出てまいります。

何よりも貴重な事実は、現在、本学同窓会館前には、千駄木の森鷗外・夏目漱石旧居跡としてノーベル賞作家川端康成揮毫による碑（文京区指定文化財番号56）である夏目漱石記念碑が立っている事があります。この「夏目漱石旧居跡」の碑に書かれた題字由来は、川端康成の父が、本学前身の済生学舎出身の医師であったことによるものであるのかもしれませんが。川端康成の幼児期に亡くなった父宮本栄吉は、川端康成詳細年譜（川端康成詳細年譜 編者 小谷野敦・深澤晴美 2016年 頁6-7 発行所 勉誠出版株式会社）によると、明治20年に済生学舎に入学し、明治24年医術開業後期試験に合格し、明治25年済生学舎を卒業したとあります。因みにこの夏目漱石旧居跡の碑の除幕式は昭和46年5月3日に施行され、本学関係者は、石川正臣元学長、北浜章元同窓会長、夏目家からは、次男夏目伸六さん（随筆家）、三女の夏目栄子さんらが、除幕の紐を引かれました。

まとめ

日本医科大学同窓会館に見られた夏目漱石旧居跡碑から明治の文豪の作品中にみられた済生学舎関連の歩みについての記載文を抜萃した。以上、本稿の各文豪の小説記載については、元日本医科大学准教授安藤勉先生のご教示を頂きました。